

総合科学の基礎C
哲学思想の基礎

2018/5/18

民主主義と多数決②

「意見」「質問」

- 疑問を持った理由（それを問うことの必要性）、自分なりの解答、その根拠を書くように。

数学的に間違い

- 「50%以上の確率で...」

授業をちゃんと聞こう

- 「ウィキペディアによると民主主義というのは...」

法律を調べよう

- 選挙カーで自分の名前、所属している党の名前を連呼するだけの政治家は不要だ。
 - 日本の公職選挙法では、第141条の3で、走行中の自動車を使つての選挙運動として
- 今回の授業から考えると、企業に属する社員は、ロックヤルソーの示した民主主義のなかにいる。
 -
 - 社員（社長も含む）は会社に雇われ、会社の指揮命令権に服する。社員から見れば、民主的であるよりは、王制に類似している。

J.S.ミルの言うとおりにか？

- 「J.S.ミルが『代議制統治論』の中で有能な人間かどうかは多数決で決めることができるというような主旨の意見を述べている。果たしてそうだろうか。選挙で選ばれているはずの政治家たちは不祥事を度々起こし、辞任する場合も少なくない」。
- 「J.S.ミルは「大衆は、たいていの場合、本能的にその人が有能な人間だと見分けることができる」とあるが、それならなぜ、ニュースで取り上げられるような問題を起こす政治家を選んでしまうのだろうか。そこで、選挙は何を基準にして投票するのかを調べたところ...」
- 「...多数決の問題は、決議者の資質と意識に結果が左右されすぎることである」。

- 多数決は、個々人の資質や意識に左右されないために行う。
- 政治家や投票者の個人の資質の問題もあるが、まず考えるべきは

◆ 坂井豊貴『多数決を疑う—社会的選択理論とは何か』(岩波新書、2015)を読みましょう。

正解がある多数決

- 「...そもそも正解、不正解がある多数決などは滅多にないのではないか。例えば集団的自衛権に関して、これを日本で認めるべきか否かに正解があるのだろうか」。
 - ある。「日本が戦争に巻き込まれないために集団的自衛権を認める」という考えにもとづいて法律を作った結果、逆に日本が戦争に巻き込まれたら、その選択は「不正解だった」ということになる。
 - 計算などのように、あらかじめ正解がわかる問題ではないが、正解だったか不正解だったかは、結果としてわかる。